大阪樟蔭女子大学論集第 44 号（2007）

身装電子年表の作成に関する基本的課題３

― 近代日本の文化変容における重要テーマ ―

高　橋　晴　子

要旨

本稿は、現在、作成しようとしている身装電子年表に関する論文の最終稿である。本年表は、近代日本を対象とした画像を含む電子年表であり、最終的には Web 上での公開を目的としている。この年表の特色のひとつは、記載事項の選択基準をはっきりと謳っていることである。その選択基準とは、1) 同時代の身装イメージの忠実な再現に役立つような内容（おもに画像によって示される）、2) 80 年間の身装の変容のステップを具体的に示すような内容、ということである。

本稿の目的は、上記の選択基準を前提として、同時代資料より年表記載事項を選択していくために必要な〈重要テーマ〉について論議し、〈重要テーマ〉を確定することである。最終的に 33 の重要テーマを抽出したが、その抽出方法は、身装をなり立たせている主たる要因を物的要因と社会的要因にわけて列挙し、それぞれの内容を時系列に添って分析するという方法を用いた。抽出した 33 の重要テーマは、「身装の社会的評価」、「衣服改良・改良服」、「衛生、健康観」、「身体観」、「着装」、「衣服の構造、制作技術」、「素材」、「子ども服、通学（服）」、「（和洋）アンダウェア」、「フォーマルウェア」、「女性の和装一般」、「男性の和装一般」、「学生、女学生」、「装飾一般」、「副装品一般」、「男女の髪型一般」、「束髪」、「化粧一般」、「美容業、美容師」、「道路、街」、「照明」などである。

１．本稿の目的

本稿は、「身装電子年表の作成に関する基本的課題」[1) 2)] の第 3 番目、最終稿である。作成しようとしている年表は、近代日本の身装の文化変容をテーマとしている画像を含む電子年表であり、最終的には Web 上での公開を目的としている。

第 1、第 2 の論文においては、主としてこの年表が、A（事件―同時代資料の提示による）、B（現況―同上）、C（年代枠には入らない回顧資料）の 3 つの欄によって構成する理由をのべた。構成のうえでのこのような特色とともに、この年表にはもうひとつの特色がある。それは記載項目の選択基準をはっきりと謳っていることで、むしろそれを強調していると言ってもいい点である。その選択基準とは、1）同時代の身装イメージの忠実な再現に役立つような内容（おもに画像によって示される）、2）80 年間の身装の変容のステップを具体的に示すような内容、ということであり、このふたつの目的に添って、原則として同時代の記録が選ばれている。

上記の 1）のための画像データ選択の基準は、それでも多くの人々の見るところが一致しやすいだろう。それは原則として、描写がリアルで詳細であることと、情報の根拠（出所）、および作者

あるいは掲載誌紙の信頼度に帰するためである。一方、2)の身装の変容、すなわち近代化への変容の複雑なプロセスのなかで、身装を構成している多くの要件の中の、なにが重要であり、また問題をふくんでいたかについては、人それぞれの考え方の違いが大きいにちがいない。身装の文化的変容にも、縫い針一本の使い方に関するような微視的部分もあれば、社会環境や時代精神のような巨大な構築物に、根を絡めているテーマもある。その数多くのテーマの中から、幕末の日本人の身装を、第二次大戦後のわれわれの姿にまで変貌させるのに役立った、もしくは係わったと思われるテーマは何であるかを議論することが本稿の目的である。

２．電子年表作成のためのふたつのテーマ群

上記 1)2)のふたつの目的に添った内容を選び出すにあたって、まず二重の枠を設けることとした。二重の枠は、つぎの基本テーマ群と重要テーマ群で構成される。

2.1.　基本テーマ群

第１の枠は、年表項目全体を構成する、広範囲でバランスのとれた内容のテーマ群である。これを〈基本テーマ〉とよぶことにする[3)]。

基本テーマは、われわれＭＣＤプロジェクト[4)]によって作成されている〈服装・身装文化データベース〉[5)]にふくまれる〈服装関連日本語雑誌記事―戦前編〉分析のための概念コード表に添ったもので、現状で約 140 テーマである。この 140 テーマはすでに近著中で提示し、成り立ちについても説明済みであるため、ここでは繰りかえさないが、原則としては出現主義である[6)]。

2.2.　重要テーマ群

第 2 の枠は、基本テーマのうち、この年表の目的にたいしてとくに関係が深いと考えられる少数のテーマを選んで〈重要テーマ〉とした。結果的に 33 の重要テーマを選んだことになるが、選択理由は、近代 80 年の身装の流れを十分に理解し、あるいはそれを論述するうえで、それぞれがひとつの核となるような内容をもつもの、と判断されたためである。〈重要テーマ〉の選定はつぎのふたつの方法によっている。

その第一は、すでにのべた基本テーマ群の選定同様、この時代を対象とする論文・記事に含まれた関連概念の出現数値に敬意を払うことである。まずは、＜服装・身装文化データベース＞に含まれる〈服装関連日本語雑誌記事データベース　カレント 1967-〉を検索してみると、明治維新以降、第二次世界大戦以前を扱っている論文・記事は、約 715,00 件中 1,535 件(2006 年 9 月現在)であった。このように絶対数が少ないため、ほとんど参考にならないが、「紡績業」、「歴史的推移」、「西欧化（洋装化）」、「風俗・習慣」にかかわる論文がそれぞれに 100 件以上は存在する。現在の研究者の戦前を対象とした研究の関心分野をうかがい知ることはできるだろう。

つぎに〈服装関連日本語雑誌記事データベース　戦前編〉を検索してみるが、これは全体の件数が 8,900 件（2006 年 9 月現在）とそれほど多くないことと合わせて、同時代の人々の身装に対する見方と、時を隔てたわれわれの見方とがかならずしも同じではない、という点が問題である。

これらの問題を前提としてだが、一応出現数を記すと、「髪型・化粧」が 8,900 件中約 1,720 件と圧倒的に多い。それに続いて、「デザイン関連」が約 740 件、「アクセサリー関連」が約 730 件、「縫製関連」が 680 件、「身体関連」が約 650 件である。なお、身体関連の 650 件のうち「衛生」や「洗浄」に関わる記事が約 3 分の 1 を占める。また、「男子服」、「女子服」、「子供服」のうち、約 360 件という出現数をもつのが子供服である。これは当時の人々の関心事を探るにはかなり有効な数字だろうが、変容のステップに関していえば、われわれが‘重要’と見るのは歴史的視点からの評価である。それは明治中期に、同時代人として詳細な流行レポートを遺してくれた、金子春夢や太田宙花にはできない視点である。したがってその時代のこれらの出現傾向にあまり重い意味をもたせるのは避けるべきだと考え、これらの出現数は一応の参考とするにとどめた。

重要テーマを選びだすための第二の方法は、より観念的ともいえるが、身装の実際をなりたたせている一般的要因を列挙し、わが国の 1868 年から 1945 年、という期間のもつ環境の推移と照応させて、その要因の抱えていた個々の課題を検討してみることである。その検討が本稿の主な内容となる。

３．身装の変容にかかわる要因

身装の変容にかかわる多数の要因を、物的要因と社会的要因にわけて分析を試みる。それぞれの要因の説明のなかで下線を記した言葉の内容が、５．の項で掲出した 33 の重要主題に反映されることになる。なお、分析の根拠となる文献の出典は、新聞の場合は、〔○○年　新聞名　月/日/(面)あるいは月/号〕と記し、雑誌の場合は〔○○年「記事タイトル」『雑誌名』月〕と記している。これらは、注 6 に示した『年表・近代日本の身装文化』のおもに「現況」の欄で引用している文献の書誌情報である。内容については、本著を参照されたい。なお、「現況」の欄以外は、欄を指示している。

3.1　物的要因

物的要因については、自然環境ないし自然的条件と、人の手によってつくりだされ、備えられた諸要因―施設的要因とに分け、それぞれに含まれる個々のテーマ(交通、道路、衛生…)をならべて縦の面とする。それに対して近現代の 150 年を、左から右に流れる時間軸とする。

このファセット構造の中へ、その時代時代の事例としてのモノとコトガラを嵌め込んでみたのが 表 1 の概念図である。この概念図を大きな指針として、各要因について考えてみたい。

3.1.1　自然環境、あるいは条件

純粋な自然環境が、時系列的な文化論議で大きな役割をもつことはすくない。それでも大都市の温暖化現象はすでに指摘はされていたし、近代前期の東京の冬は現代と比較すると極寒の日が多く、真夏の温度はやや低かった事実は注意に値する〔1892 年 大阪毎日 2/18(3)「事件」欄；1930 年 朝日 7/16(11)〕。

このような気候を背景として、資源という意味での繊維素材と、自然の一部にはちがいない人体についての問題をここに入れた。

表１　　物的要因概念図

	Ⅰ（1870～1900）	Ⅱ（1900～1945）	Ⅲ（1945～）
自然環境			
気候			都市性温暖化
素材	舶来毛織物	レーヨンの参入	化学繊維
身体的条件	衛生観念の普及	身長・座高等の向上→西欧人化 →	正座の消滅　体型の変化
	肉・乳製品摂取を中心とした栄養 →		
	学校での女子体育	スポーツの普及・人気	寿命の延長　年齢観の変化
施設的環境			
交通機関	近距離交通機関の発達（馬車・人力車	市内電車・バス・近郊電車）　自動車の普及→ 外出の容易化	
道路	道路舗装（砂利舗装）	人道の普及 → 遊歩道	大都市のアスファルト舗装の整備
		ファッション・ステージの成立	
地域サービス（公共的・商業的）	学校・郵便局・病院・勧工場・展覧会	・博覧会・公園・公設市場・デパート、劇場、映画館、レストラン、カフェー 美容院	
地域衛生	総雪隠の消滅		
	公衆便所の増加	公衆的トイレタリーの普及　デパート、カフェー、駅等公共施設	
建造物	履物を脱いで上がる・膝を折る・しゃがむ	→ 土足のまま・立っている・腰掛ける	団地、マンション・プラン
	西洋風建築の増加　学校、兵舎、官庁	オフィス　商店（百貨店）劇場 レストラン・カフェー	↓　↓
住居	‘畳の上三尺の美学’	文化住宅　洋間（応接間・客間・書斎）、子ども部屋	個室型プラン → 密室化
		カーテン、ベッド、ピアノ	各家に浴室、トイレの水洗化 → 無臭原理
ライフライン関連	主婦労働の軽減へ		
給水・水道	上下水道の整備	戸別水道の普及　入浴・洗髪の容易化 → 洋髪、パーマネント	
照明・電気	石油ランプ	白熱電灯　定量制 → 従量制　明るくなった街と室内生活の夜への延長	蛍光灯 → 完全照明化
	街灯と軒灯の普及	店頭照明・広告照明の発展	
冷暖房	‘火鉢と着ぶくれ、団扇と裸’	扇風機　ガス・石油	セントラル・ヒーティング化 → 屋内の恒温化

外国貿易がはじまって以後、わが国の衣料に決定的な影響をもったのは、毛織物の使用だった。毛織物はその消費された量からみれば、男性の洋服地としての比率が圧倒的だろう。男性洋服における舶来毛織物はあまりに支配的で、それ以上の問題のありようがなかったのに較べて、女性の和装への毛織物の浸透はもっと微妙である。 ただし、セルにしろネルにしろモスリンにしろ、女性達も流行情報のライターも、また流通業者の多くも、それを毛織物として別扱いするのではなく〔1896 年 家庭雑誌 2/10(43,44)〕、多様な素材の中のひとつとして扱っており、むしろ 1900 年前後以降における、和装素材の目を奪うような多様多彩化の全体像のなかで捉える方が、そのあり方が見えやすいといえる。

毛織物に次いで日本人の衣生活を震撼させた素材は合成繊維、あるいは化学繊維であった。ただしそれがもっとも大きな力をもったのは、第二次大戦後のことと考えるべきだろう。1920 年代以後の人造絹糸は、日本人の衣料としてよりも、輸出産業として重要な意味をもっていたといえるかもしれない。

以上、各種の繊維素材はそれぞれが重要テーマのひとつでもあるが、本年表では二次加工（染・織等）を経て最終加工（仕立て）を待つ段階の染織商品の種類も合わせて、素材という単一のテーマ

とした。それは布地としても交織品がきわめて多く、またいろいろな原料の衣料品を組み合わせて着用することが、身装の実際であるからである。ニット類、レース等のニードル・ワーク製品もおなじ理由で素材に含める。

人体、直接には日本人の身体については、１世紀あまりの間の大きさの変化がなによりの特色である。年表がその統計的数値を年を追って紹介する必要はないが、身長の伸びや体型、体質の変化は、その時代の人びとにとっての関心事であっただけでなく、日本人の洋装化、ないし‘西欧化’にとっての大きな条件でもあった〔1914 年 読売 4/25(5)；1922 年 朝日 4/28(7)〕。

身体が大きくなったということは結果であるが、その結果をもたらした環境―医療・公衆衛生の向上、栄養の向上、体育、とくに女子のための学校体育の普及、スポーツの普及等に関するデータには十分な目配りが必要である。

栄養・医療・環境の改善にともなう寿命の延長が、年令観の変化―それまでの通念としての‘歳’よりもずっと若く見える中年者や老人を珍しくないものとしているし、逆に現代人の目から見れば、明治の日本人の老け方の早さにはおどろかされる[7)]。この年令観の段差は、衣服を‘年齢で着る’といわれる日本人にとっては小さくない問題だろう。こうした問題は、身装の社会的評価に含まれるテーマのひとつである。

身体にかかわる多面的なコトガラの一端には、セクソロジーにも関連のある身体観、また衛生、健康、体力、運動についての施策、社会的通念といった内容が浮かび上がる。

3.1.2　施設的環境

道の良し悪しや乗りものの便不便は、外出のしやすさを左右するだいじな条件である。
道の良し悪しなどは今日の都会生活ではほとんど忘れられているが、すこしの雨でもすぐぬかるみや水溜まりをつくるアスファルト舗装以前の道は、とりわけ女性の外出を妨げていたはずだ〔1886 年 郵便報知 4/8(2)；1897 年 日日 7/17(1)；1920 年 朝日 4/22(5)；1924 年 日日 8/3(夕 2)〕。

もちろん都会の主要道路については、江戸時代であってもそれなりの道普請は行われていた。しかし明治中期の東京でさえ、砂利を入れて叩いて固めるという方法がふつうだったから〔1900 年 朝日 1/7(2)〕、到底長持ちするものではなかった。とりわけ 20 世紀に入って自動車が疾駆し出すと、土の道に大きな穴を開けることが問題になった〔1918 年 朝日 1/4(3)〕。しかしその一方でごく一部のメインストリートでは、それまでわが国にはなかった人道車道の区別が設けられ、人(歩)道には石や木材の舗装道路が敷かれ、街路樹が植えられた〔1906 年 朝日 12/23(6)〕。また銀座のように、広くとられた歩道には日が暮れると夜店がならび、散策のひとで賑わった。このように都会の街路のあるものは、そぞろ歩きすることそれ自体を楽しむ空間としての成長をはじめ〔1912 年 朝日 8/14(5)〕、欧米的なファッション・ステージへの発展が予見されはじめる。

道路の機能の延長として、交通手段の発達、とくに多様化は、人々の外出の頻度、態様にいろいろな面で影響をあたえた。それは単に外出がしやすくなったということだけでなく、例えばおなじ普段着でも、‘電車に乗れる格好、乗れない格好’といった思慮を生んだこと、などに留意する必要がある。

大都会では公的な、あるいは商業的な施設が巨大化して、その本来の機能とはかかわりなく、地域の顔のような印象を生んでいることがある。とりわけ洋風建築物の珍しかった明治期には、小学校や公立の大病院などの3階建てぐらいのペンキ塗の木造建築物でも、ちょっとした城のような存在感をもっていたに違いない。しかもこの城は、文明開化を人々の目に印象づけるだけでなく、西洋風の生活の仕方を体得し、あるいは日本人の姿勢の悪さを正すような実習の場でもあっただろう〔1872年 新聞雑誌9月/60号〕。

小学校、郵便局、市区役所や町役場、銀行、公設市場など、こういった場所では履物を脱いであがる所は次第に少なくなり、最初は畳敷きだった病・医院や床屋・理髪店の待合所も、やがて椅子や長いすが置かれるようになる。呉服屋での買い物も、畳に正座した番頭・手代に対して客も畳に坐って向かいあうか、上がり框に横座りするというそれまでの習慣から、売り手も買い手も立ったまま応対する、という風に変わってゆく。最初のうちはこれを勧工場式とよんでいる〔1900年 朝日10/19(4)；1903年 報知7/25(5)〕。また、歌舞伎芝居の劇場も一歩ずつではあったが椅子席を取り入れてゆく。

それまでの日本人は長時間腰掛けるという習慣をもたなかった。神仏に向かっても先祖の墓の前でも、蹲踞して膝を折って拝んだ。家の中では畳の上三尺(約一メートル)の高さの中にたいていのものがあって、食事も遊びも読書も家事の多くもその高さの範囲内だったから、坐るか屈むかの姿勢で用が足りた。

そういうなかで、西洋風の立居を日本人のからだに最も決定的に覚え込ませたのは、おそらく小学校に通う数年間だったろう。日本人からしゃがむ習慣、さらに正坐の能力が消えていった理由は、洋風の建物の中で、立ち机と椅子で行われた学校生活の影響が大きいにちがいない。また、概して西洋の風習としては、しゃがむスタイルを嫌う。このような観点から、からだの形、姿勢、動作をめぐって、生活環境からの幅広い理解による問題把握が必要である。

鉄道の駅、劇場、展覧会場、病院、公園、都心の商業施設などは、またべつの大きな役割をもっていた。それは長時間の外出時に、とくに女性に休息や化粧直しの場を提供することである。維新後まもない時期から、行政は街路での排尿に非常に厳しい態度をとった以上、大都会での公衆便所の設置には相当の努力を払っていたが、そのほとんどは、長い裾や袂をもつきもの姿の女性が利用できるような状態ではなかった〔1876年 読売4/12(2)；1912年 読売4/6(3)〕。

また大戦以前の日本の大都市のそこここは、敏感な嗅覚のひとや欧米観光客にとっては、ドブと汲取便所の臭気の漂う臭い街だったらしい〔1874年 日日3/17(1)；1879年 郵便報知9/18(3)；1883年 読売7/29(2)；1922年 朝日8/10(3)〕。近代的な下水施設の整備は当然明治初期から着手されたが、郊外住宅地域を含めた大都市のほぼ全域で、便所の水洗化と自家浴槽が同時進行的に急速に普及したのは、ほぼ百年を経た1970年代以後のことだった。以上、このような都市施設にかかわる問題は、衛生・健康に関するテーマに含めることもできるし、あるいは清潔観、不浄観といった社会心理的捉え方として、身装の社会的評価のうちに含めることも可能である。

水道がすべての家庭に引かれ、蛇口を捻れば水が出る、という段階になるのは東京横浜では関東大震災以後であり、市域でも一部では大戦に近い時期まで共用水栓が用いられていた。各戸別

の水道の普及が身装にもたらした最大の貢献は洗濯がしやすくなったことで、水道が引けたために女中を解雇する家も結構あったらしい〔1904 年 朝日 5/23(5)〕。

水道の普及はまた洗髪も容易にした。とりわけ髪結いから美容院への脱皮のひとつの必要条件でもあり、シンボルでもあったのは、舶来のシャンプーを用いての洗髪だったはずである。髪結店・美容院での洗髪の施設が、洋髪、さらにパーマネント・ウエーブの普及を促したのだった。

これらは衛生、とくにからだの清潔に関する問題、そしてまた都市施設の問題である。また同時に都市の近代化のシンボルのひとつであった女性の美容、そして美容院の発展から、この問題をとらえるという視点もありうるだろう。

家庭の電化は、戦前では第一が照明用の電燈、'20 年代末以後のラジオ、そして身装に直接関係あるものとしてのプレス・アイロンだった。アイロンはおそらく洋装の普及と雁行して必要性が高まり、1930 年代あたりを中心にして中に炭火を入れて熱するタイプのものから、電気アイロンに変わったのである。明治期の男子礼装には、身体に合ってもいないために、シワだらけのフロック・コートで反り返っている紳士の姿がすくなくない。 やがて上着にせよシャツにせよ、シワやゆるみのないピンとしたものを着る、という心掛けが洋服の常識としてゆきわたり、新聞の家庭欄や婦人雑誌に、ワイシャツの衿周りや袖など厄介な部分へのアイロンの当て方の記事をみかけるようになる〔1921 年 読売 4/23(4)〕。

'しわやゆるみのないピンとした' 美しさは、ほんらいテーラリング・テクニックにともなうより西洋的な伝統であるが、やがてこういう美しさに慣れた日本女性の感覚は、和装にも同じような美しさを要求するようになった。こうしたなりゆきは、衣服の制作技術や着装法の問題であるとともに、その時代時代になにが〈美しいひと〉の条件になりうるのかという、社会的価値観の問題にもつながっていく可能性をもっている。

近代の照明は維新前後からの石油ランプにはじまり、ガスは一時期の街路照明としての役割にとどまって、1890 年代には白熱電灯が公共の建物や街灯だけではなしに、少しずつ家庭にも入りだす。 近代の市街がそれ以前の時代の街並みと大きく印象を異にするのは、おそらく夜の明るさだろう。街が明るい、というだけで夜はより楽しいものにもなる。電燈の普及は歌舞伎座などの芝居小屋の夜興行を可能にした。芝居や寄席の夜間への延長は盛り場周辺の人出を増す。しかしもちろん夜へ延長されるのは興行物だけではない。社会生活も個人生活も、いわば全体として文化が夜の方に延長される、あるいは夜の方にずれてゆくのである。

電燈照明のあかるさが身装に与えた最初の直接的影響は当然のことながら、電燈の下で映える衣装や化粧についての思慮を生んだことである〔1896 年 「彙報」『早稲田文学』3 月；1915 年「女の姿と新しい流行の源」『生活』7 月〕。その一方で明るすぎる照明が失ったものは、幕末までの行燈のつくりだしていた様々の幻影である。例えば近世の女性の顔の化粧法は、仄暗一方光線の行燈明かりの傍らに坐るひとを、映えさせるような方法でなければならなかった。また、一方光線はものの陰翳を際だたせ、衣裳のゆるみや襞のうごきも強調し、金銀糸や長い浮きをもつ繻子系の絹織物は、そのほんらいの輝きややわらかい光沢を生んだ。

真上から照らされる電灯の明るすぎる光は、当時はまだ正しい意味での完全照明ではないのだ

が、そうした美しさを過去のものとしてしまい、また役者や中年女性の化粧をむずかしいものにした。これらはまさに、その時代環境がうみだす〈美しいひと〉に関する議論になる。

冷暖房についていえば、19 世紀末までの民衆の一般的な過ごし方は、夏は団扇と裸、冬は火鉢と着ぶくれという表現が要領を得ているだろう。柱構造の日本家屋は基本的に夏向きだが、それでいて日本の気候は冬より夏の方が耐えがたいという。結局男も女も裸か、それに近い姿でいるより仕方がない。実際、大方 1 年中褌ひとつでいるような稼業もあったし、長屋暮らしのなかでは夏は腰巻きひとつでいる女房がそれほどめずらしくもなかった〔1873 年 新聞雑誌 8 月/12 号〕。行政や知識人は、近代、というより西洋的習俗の視点から、男女の立ち小便とか、男女入り込みの湯屋とか、法被股引を着ていない車夫を処罰した。しかし人前で胸をはだけ赤ん坊に乳をやる母親とか、肌脱ぎとか、尻を捲るとか、人目も構わずズボンを下ろしてシャツをたくし込むとか、車中で直ぐに靴を脱いで前の座席に足をのせるとか、処罰の対象ではないが、‘日本的な’行儀の悪さとされるこの種の行為は、むしろ最初にのべた身体観のなかでの、あるいは衣服の仕立て方、着装法のなかでの、好個のテーマとなる。一方、着ぶくれに関しては、綿入、襲ねの消滅や、毛織物、毛皮の利用の普及という、仕立て、着装法、衣料素材をめぐってのテーマが中心となる。

3.2　社会的要因

社会的要因は物的要因に較べると、それをとらえる観点に、議論の目的によって差異が大きいのだが、ここでは、〈服装専門分類表〉[8] のファセットの横軸を参考として、つぎの 5 つの要因－体制の思想（時代精神）、消費、教育、情報、生産・流通・労働を設定し、それぞれの要因について分析を試みる。なお‘体制の思想’は、〈服装専門分類表〉の行政の項目を拡張したものであり、これはいわば時代精神の断面である。民衆に力を及ぼし、民衆を支え、ときとしては民衆自身がふくらませた、その時代の支配的な発想法なり、発想の原点なりが、‘身装の思想’にも当然大きな力をもっていたはずと考えたためである。

なお、社会的要因の概念図は、紙数の関係から掲出を省略するが、考え方は物的要因と同じであり、上記の 5 つの要因を縦軸として、1868 年以降の時の流れを横軸においている。

3.2.1　体制の思想（時代精神）

明治のはじめの時代も現代も、新聞の一、二面(政治・行政・外交・軍事・経済欄)に載るような世界では、身装などは存在しないかのような存在の仕方である。なければならないものではあっても、着ていることを忘れていられるようであるのがよい服装を意味し、服装の機能はそれに尽きる、というのが一、二面的男社会に受けいれられた考え方といってよい。維新の変革に続く時代は、とりわけそういう意味での男の社会だったようにみられる。装う、着飾るという行為が、美的価値基準によって社会から正当な評価をうけることのない精神的風土でもあったろう。もともと装うという行為の主な目的は、自己の所属するもの――アイデンティティの表現と、個人的魅力の表現とである。しかしある種の体制のもとでは、個人的魅力はアイデンティティの中に吸収され、このふたつは一体化する。明治の末の女子教育家のひとりは、自分の一番好きな男の格

好は上下(かみしも)姿ですと言っているが、この老女と同じ根底の男子服観は、‘バリッとしたダークスーツ’に固執する現代のビジネス社会にも生きているかもしれない。

以上のような環境のもとでは、身装は徹底的に差別――階級、貧富、職業、性、年齢等々への嵌め込みの手段として利用される。‘なになにらしく・・・・・・・・’という、人間の枠付けの論理である。この時代のオピニオン・リーダーが繰りかえして言うのは、‘身分にふさわしく’という訓えだった。そういう時代の人達はまた、過ぎ去った封建時代を懐かしむかのように、この頃は着ているものでその人が判らなくなったと、まるでそれが世の末のことのように嘆いた〔1899 年 朝日 8/8(3):8/30(7)；1936 年 日日 9/8(8)〕。

人間の枠付けへの志向は、また標準化の志向としても現れる。1930 年代半ば、世の中がすべて戦時下の統制の時代に向かうとき、標準化は物資の統制にも思想の統制にとっても便利、かつ必要であったので、衣生活の標準化、そして標準服、国民服の模索がはじまる。それは決戦下の皇国日本国民であるというアイデンティティが、すべての個人的自覚に優先する時代だったためである。

このような身装の社会的アイデンティティに関する内容は、具体的には素材や、着付けや、髪型や、フォーマル・ウエアなど個々のトピックに係わっているが、とくにその意味づけが重要であるような事例については、身装の社会的評価、規制という括りの指示が必要と考える。

3.2.2　消費

重苦しい身分観念と自己規制の面からのみ日本の近代を考えることは、もちろん誤りである。維新後の 80 年間は、かって世界のどんな国も経験しなかったような、急速な国富の増大によっても特色づけられる。20 世紀の初めには、我が国は欧米に、とりわけアメリカに追随する市場原理社会の門口に立っていた。明治から大正期の婦人雑誌を通覧した私がつよい印象をうけたことのひとつは、節約が日々の消費生活のなによりもの美徳であった旧世代に属するオピニオン・リーダー達が、何度も繰りかえす生活の知恵と、月々三越、白木屋をはじめとする大呉服店の、華やかな溢れるような商品情報との乖離である。

和洋服の二重生活の不経済さがつねに指摘はされるものの、大部分の市民は洋服も和服もひとつの服種として受け容れ、むしろその二重性を衣生活の豊かさと感じていたとも考えられる〔1912 年 読売 5/5(1)；1923 年 都 3/3(9)；1938 年 「着物と洋服の二重生活を論ず」『スタイル』7 月〕。新らしい着物をこしらえるのは生活の必要からというより愉しみであり、愛蔵品を一点増やすという感覚でいる、ゆとりある階層が少なくない社会へと日本は変わっていたのである。人々の衣生活をなり立たせる基盤としての個人と社会の経済的背景と、それに関連するものの価格の記録は、ぜひ必要なテーマのひとつである。

生活のゆとりはとりわけ女性の場合、教育の向上と結びついたとき、さまざまの意味での古い桎梏から解放された人間性を育てた。施設的環境で指摘したような外出のしやすさがこれに加わって、女性の生活は家の中から外へ向かい、社会に拡がった。早くも 1886 年に生まれたキリスト教婦人矯風会をはじめとする多くの婦人団体を足がかりにした、女性の対社会的発言と活動〔1910

年 朝日 2/16(6)～〕、また一方では、それまでは呉服屋の番頭を邸に呼んで注文していた階層の奥様も、都心のデパートまですすんで足を運ぶようになる。そのデパートや有名商店の建ち並ぶ銀座通り、現代とは比較にならないくらい話題を集めた上野の美術展覧会、各種の博覧会や音楽会、劇場の主役は、着飾った若奥様や令嬢たちだったかもしれない。こうした外出の機会の増加が、この時代を代表する服種である訪問着の誕生の背景だった〔1895 年 『社交一斑』(民友社、p.84) ; 1909 年 「花見姿」『新小説』4 月〕。女性が人中に出る頻度が増すということは、織元の側にも、大勢の中で引き立つ柄や、それでいて何回か着て出られる柄といった、色柄の工夫が求められた〔1916 年 読売 9/20(4)〕。

女性の社会進出のべつの様相は職業婦人である。職業婦人の身装は、和装と洋装の是非に関する問題、制服に関する問題、衣服の機能性に関する問題、長時間家の外にいる女性の化粧の問題、自家縫製と既製服などの経済性についての問題など、この時代の身装をめぐる多くのテーマがここに集約される。

3.2.3 教育

教育に関しては、普通教育の浸透、女子教育の向上、充実が身装との直接の関わりをもっている。当然のことながら江戸時代も女性、ということは家庭の女にとって裁ち縫いのわざは欠かせなかった。しかし女性達の多くは肉親からの伝習を受けたにすぎないから、一般には技術の水準も低く、まして改善や工夫は乏しく、仮にあってもその拡がり方は遅々としていたに違いない。学校の授業としての裁縫教育のもたらしたのは、一般的な技術の向上と趣味性の向上であったと考えられる。文部省の管轄のもとに、広い視野から新しい技術の受け容れや教育法の改良がつぎつぎに行われた〔1886 年 改進 8/6(3)〕。そのなかには、シャツ、西洋風股引などの洋風下着の実習がかならず含まれた。良人や子ども達のアンダウエアは、手縫いで、あるいは家庭ミシンで、ぜんぶ主婦の自製という家庭が、第二次大戦前後までも案外多かったのである。

一方技術の錬磨と、着物を見る目の趣味性の向上は、江戸時代から引き継がれた、現代人の眼から見ればだらしのない着付けの明治和服を、屋敷風、もしくは学校風というプロセスを経て、昭和和服へと発展させてゆく。昭和和服の感覚的完成については、明治と昭和ふたつの時代を比較できる立場にいた、日本画家も指摘するところである[9)]。

教育に関するテーマはこのように、直接には具体的な衣服の構造、製作技術、着装法、あるいはアンダウエアなどの側から捉えられる内容になるが、すでにのべた経済的環境とあわせて、職業婦人、学生・女学生、さらに女性の訪問着など各種外出着の諸テーマの内容をふくらませることになる。

3.2.4 情報

情報は広義には教育もその中に含めるが、ここではマスコミ情報、および映画情報に限定する。身装に関連する情報は、1910 年代にはじまる婦人雑誌の圧倒的影響が中心である。戦前の婦人雑誌のとりわけ呉服物の流行記事は、その 8 割までが百貨店、大呉服店の宣伝の片棒担ぎと言って

もいいすぎでない内容だった。年表項目中には、流行記事を読んだ読者が、それを鵜呑みにするのではなく、いっぺん立ち止まることを求めるような内容の記事を多く採録しているが、情報に関する重要テーマと考えられる記事の一部は、その種のものである。 例えば「流行流行と呉服屋さんも云えば小間物屋さんも云えど、さりとて皆さんが新聞にあるような立派な流行ものを、オイソレと買われるものでもなし・・・・・・・・。」といった指摘[10]、金春模様が流行りの時期、記者の質問に対して「あれは新橋の芸者(俗に金春芸者とよぶ)から流行したのです」と平然としてとんでもない間違いを説く呉服屋の番頭の例[11]、雑誌掲載の流行の時期のズレについての弁解[12]、流行記事を書く記者自身の無知を告白している例[13]等々である。

またとくに変容のステップの観点から、海外流行情報の消長については、紙誌面におけるその扱い方、戦時中における態様などは重く見なければならない〔1893 年 国民 11/5(1)；1898 年 国民 10/4(7)〕。

近代の身装情報の中での映画の果たした役割の大きさは、あらためていうまでもない。欧米風生活スタイルの日常化に及ぼした影響とともに，日本女性の〈美しいひと〉のイメージに与えた影響もはかり知れないだろう〔1922 年 東日マガジン 4/30(3)；1926 年 「東京大阪モダンガール風俗考」『婦人画報』11 月；1931 年 都 11/15(9)、都 12/20(9)〕。美人画家の鏑木清方も、大正の背中が半分見えるような抜衣紋は舶来好みが起源となったと述懐しているのが、とりわけおもしろく感ぜられるのである[14]。

3.2.5　生産・流通・労働

生産・流通に関する問題としては、海外貿易の結果としての毛織物を主とし、そしていわゆる舶来洋品のさまざまの受容が中心である。ただしこれらのものの多くは、素材、装飾品、副装品、はきもの等の中のアイテムのひとつとして採録される。

生産と流通の近代化を特色づける現象のひとつは、人口の都市集中と工業化の進展である。衣料品、副装品の多くが工業的大量生産によって価格が下落、一方仕事をもつようになった女性に家事労働の時間が乏しいという両面から、家事としての縫製の終焉、あるいは変質(趣味化)と、既製服の誕生という結果が生じた〔1899 年 朝日 12/28(3)；1909 年 日日 10/23,24(6)；1922 年 「世帯の会の既製服」『世帯』9 月；1926 年 読売 8/13(7)；1934 年 読売 3/13(9)〕。しかし近代 80 年についていえば、かなりの偏見のもとにあった‘出来合服’の普及は、意外に足取りが重かったのである。このことが戦前において、ファッションも、ファッション・デザイナーも育ちにくかった社会的背景とどう結びつくのかも、興味あるテーマのひとつだろう。これらは衣料業界と供給システムというテーマによって括られる。

４．近代日本身装史への鳥瞰的視点

重要テーマをぬきだす方法として以上に示したのは、身装をなり立たせている主たる要因を列挙し、それぞれの内容を時系列に添って分析するという方法であり、出現事例に沿っての実証的方法ということが許されるだろう。

しかし本稿のまとめとして、そうした個々の出現データの検討とはいくぶん別のスタンスだが、大量の新聞雑誌等のデータを通観してきた経験から、いわばやや鳥瞰的に、80 年間の身装の展開に認められるある傾向を指摘しておきたい。

端的にいえば、日本の身装における近代 80 年は、3 つの段階、そしてその 3 つの特色で説明することも可能だろう。それは、① 洋装の受容　② 和装の変容　③ 日本と日本人の変容　の 3 段階である。

4.1　洋装の受容

洋装の受容とはあまりに漠然とし、また当たり前すぎるようだが、私がここでいう洋装とは、文明化のための社会的インフラとしての洋装であり、着る、というより、身体にぶら下げられた看板であった洋装をさしている。〔1872 年 日日 5/11(1)；1876 年 日日 7/22(2)；1890 年 朝日 11/2(1)、日日 11/2(2)、日日 12/3(3)；1908 年 『写真画報』9 月〕

近代の、ことに前半期の洋服論議を目にして、現代のわれわれが怪訝に思うことのひとつは、その時代の日本人が、欧米風の服装を狭く、また形式的に捉えて、その固定観念に立って受け容れの努力をし、あるいは批判していたことである。曰く女性の洋装には窮屈なコルセットをかならず用いなければならない、曰く洋服には帽子をかならずかぶらなければならない、夏といえどもかならず手袋を用いなければならない、曰く洋服地は毛織物でなければならない等々。

これはいうまでもなく近代初期の洋装受容の大部分が、欧米風のプロトコールの一部としてのものだったためである。そういうプロトコールの実際の体現者である貴顕の人々は、直接パリのオートクチュールに注文もできたし〔1872 年 新聞雑誌 8 月/56 号〕、そうでないまでも少数の外国仕込みの一流洋服店の顧客であることができた。しかし大部分のその時期の洋服が、1890 年代には東京市中だけですでに 1,000 戸以上が営業していたようだが〔1899 年 朝日 12/17(5)〕、なかにはにわか洋服裁縫師の手になるものも少なくなかっただろう。

日本のその時代の洋装には、じぶんを美しく見せるという感覚的価値観への思慮はほとんど欠落していたし、まして着るひとも見るひともそういう価値を楽しむような気持ちのあり方ではなかった。乃木大将が着ている大礼服と、それほど遠くない洋装認識のなかでは、ファッションも、おしゃれも、むしろ違和感や不快感の対象だったろう。このような、ひとつの規範として強制され、学習された洋装は、学生服や末端の勤め人の安物の背広姿までをも、‘フォーマル・ウエア’的な頑なな自意識のもとに身につけさせる伝統をそだてたともいえよう。

ややちがう意味をもっていたが、ほんらいの目的であるよりは、しばしば開化の印として、もしくはその中での成功者の看板として提げられる洋装の一種だったのは、各種の宝飾品・真珠〔1895 年 家庭雑誌 2/10(47,48);1908 年 朝日 9/2,5(7)；1919 年 読売 1/10(4)〕、帽子、靴、革鞄、蝙蝠傘、変わったものとしては、アルミ製の飾り金歯もそのうちに入るだろうか〔1892 年 国民 8/13(3)〕。

洋装に対する固定観念のひとつに、洋装は夏向きのもの、という認識が、フォーマルウエア的洋装観のつぎの段階にあらわれる。これは洋装が市民化しはじめる 1910 年代以後の傾向である。1920 年代半ばには、欧米における女性のスカート丈の短縮が、わが国にも波及しはじめているの

で、「西洋は暖かいところだから・・・・・・・・」とか、「西洋の家は暖房が行きとどいているから・・・・・・・」という前提のもとに、寒いときは洋装は不向きと決め込んだ可能性もあると考えられる。これは、洋装と欧米の実生活への理解の乏しさが原因にほかならない。

あいかわらずの洋装規範主義はなくなりはしないが、その一方で、乏しい知識の範囲内での‘洋装’の拘束にとらわれないで、日常の衣生活の向上のために、外来の知恵も採り入れようとするゆとりのある姿勢は、1920 年代にはしだいに目立ってくる。

4.2　和装の変容

伝統和装の側の変化は、衣服素材である染織製品の多様化と、衣服の構造、着装における軽装化という、ふたつの方向に特色づけられる。

明治時代とそれ以後の染織製品の発展の理由をここに説明する必要はないと思うが、それを推進した背景のひとつは、1877 年に第一回を催し、その後 4、5 年間隔で開催された内国勧業博覧会への出品競争という一面があったはずである〔1881 年 日日 9/2(3)；1890 年 朝日 5/8(4)〕。博覧会のあるたびに染織品展示場は人気の中心であった。1903 年 3 月の博覧会の工業館染織物陳列場の盛況を新聞はつぎのように報じている。

> 館中の人気茲に集まりて婦女ならぬ身にも脚は自ずから躊躇(ためら)わるべく・・・・・・その陳列の面積も一千二百三十五坪を占領して猶足らず大阪愛知奈良の如きは其別館の三分の一ずつを之に割くきたるを見てもいかに染織工業の進歩発達せしかを知るに足らん・・・・・・〔1903 年 朝日 3/27(7) 〕

この文章に続く各地製品の紹介中で、従前はある製品の本場といえば他の産地は土違い水違いということから手を出さなかったものが、いまは名の通った本場製品に劣らない品が各地から織り出されて、しかもそれぞれの産地が、新しい工夫を加えることによって他産地から抜きんでようと懸命の競争を試みている、と指摘している。

その結果シーズンごとに発表される新染織品の数も夥しく、何百とある帯地から、織元のつけてくる符牒を採ってしまったら、本職にもそれがなんであるか判らなくなってしまうという状況になっている[15]。

呉服物のこうした際限のない多様化は、もちろん消費の飛躍的増大がそれを支えたのであり、日露戦争後、第一次世界大戦後の好景気を中心にした、上・中流市民層の富裕化を記憶しなければならない。この先どこまで贅沢になるかと思われた 1920 年代、’30 年代の訪問着、絵羽、付下げ等に代表される派手で、華やかな色柄を、幕末から明治中期までのあの黒ずくめといってよい庶民の着物と比較すると、和服はもはやべつのものに生まれ代わったという印象をもつのである〔1925 年 婦人画報 11 月〕。

着物の軽装化は、構造の面では綿入、裾綿の消滅〔1919 年 「綿入れを着ない工夫」『婦人世界』3 月；1920 年 読売 2/1(4)〕、各種の揚げの消滅、各種の簡易帯の普及〔1910 年 「我邦の婦人は斯くまで贅沢になれり」『婦人世界』11 月；1929 年 読売 5/4(3)；1934 年 朝日 10/30(8)〕に代表され、着装法では曳裾の消滅〔1918 年 「美容雑話」『婦人画報』12 月〕、襲の消滅〔1906 年 「春着いろいろ」『文

芸倶楽部』1 月；1909 年　『流行』(白木屋)12 月(3)；1916 年 読売 11/22(4)〕に代表される。これらはすべて和装の欠点と指摘された、身体の自由な動きや、乗りものに乗る機会が増えてからことさら痛感された〔1919 年 都 11/8(2)〕、行動のしやすさを妨げるような要素を捨て去るという方向にあることは明白である。その意味では、化粧における和風濃化粧から洋風薄化粧、日本髪から束髪、洋髪への転換もおなじ方向の変容である。またかならずしも軽装化ではないが、特定目的での女袴の採用、和装コート、ショールの普及も同一の軌道のうえにあったといえよう。

和装の変容には、洋服への接近というひとつの方向もあったことはたしかである。きものの仕立てにおける、細部的な洋服構成技術の応用といったこともあるが、重要テーマとしてより着目したいのは、着物に応用される洋風の色柄〔1887 年 時事 5/21(2)〕、洋服風のフィットネス〔1923 年 読売 5/7-9(4)〕、そして全体のシルエット〔1925 年 読売 1/20(7)；1933 年「着ぶくれの目立たぬ美しい着付」『婦人世界』1 月〕といった点についての斬新な感覚的価値観、すなわち新しい〈美しい女性〉にかかわる問題であろうと考える。

4.3　日本と日本人の変容

日本人の服装の洋風化は住居が変わらないかぎりは無理、という意見は、われわれが対象としている時代の初めからのひとつの常識だった。それと平行するようなもうひとつの常識は、洋服は活動に適しているので男も女も昼間は大いに洋装で動き回ればよいが、家に帰ったら、くつろぐのはやっぱりきものにかぎる、という考え方だった。

1923 年に京浜地方を襲った関東大震災は日本人の衣生活の変質の予兆程度にすぎなかったが、第二次世界大戦による徹底的な喪失、その後もしばらくは引き続いた消費物資の不足、そして再建と高度成長、世紀末のバブルとマンション・ブームの過程で、都市の平均的住生活は半ば洋風化し、一方各家庭のタンスの中の巨大といってもよかった和服のストックは失われた。明治期の身装を支えていた物的インフラはすっかり変化して、その点については過去の日本は消滅した。

ところで、「新しい女」ということばがいわれだしたのは、1913 年の夏頃とされる。彼女たちの外見の特徴を“目玉の大きな、髪の赤茶けた、無造作なようでどこかツンとすました…”と描写した人がある〔「新しい女」『大正公論』1913 年 7 月〕。自分でものを考え、言うべきことは言うようなタイプの女性は、それ以前の羞じらいと従順さと愛嬌を売り物にしていた女たちと比べれば、たしかに一種の新人類ではあった。そういうタイプの女性達を含めて、「日本人は変わった」という指摘、感慨は明治の末からあったのである〔1910 年 朝日 1/29,30(5)〕。とりわけ女性の場合は、羞じらいと従順さが旧い日本の女らしさの標識のように考えられ、新しい女からおよそ 10 年後に出現したモダン・ガールはその点で日本的女らしさからの距離を、もう一歩拡げたといえるだろう。

上記の『大正公論』の新しい女の描写には、知的で、あまり人目を気にしない女性の自立的雰囲気がかいま見える。近代女性の変容の中のそれは確かなひとつの方向である。しかし大衆的視野のなかでの女性の変容はもうすこし別の姿をとる。もっとも著しいのは外人、あるいは西洋人っぽく見えることを女性たちは望んだ。日本の近代化は、さまざまな領域での先進的文明の装置

の受容という切実な努力と平行して、欧米人に憧れ、欧米人のようになりたいという、もうひとつの切実な情意にうごかされていたように思える〔1886 年 朝野・やまと 11/28(2)；1922 年 「欧化された髪の形」『婦人画報』6 月；1928 年 国民 8/11(5)；1935 年 朝日 6/13(5)〕。女性の場合であると、外人のように見えることが、つねに化粧や、ときには美容整形の目標のひとつだった〔1915 年 「顔に似合う化粧」『婦人世界』5 月；1922 年 「洋化しつつある我等の生活」『婦人界（金港堂）』10 月；1924 年 「活動に適した新年言志巻の結方四種」1 月；1934 年 読売 6/21(9)；1935 年 「最近の美容傾向としての額の美を強める化粧」『すがた』3 月〕。

そして実際ある時代から、和服が似合わず、着たとしても外人っぽいきかたをする日本女性が出てきたり〔竹久夢二の指摘。 1925 年 「夏の街をゆく心」『婦人画報』8 月〕、からだの格好が洋服向きになって、銀座を歩いてみても純日本風美人には会えなくなった、という記事も残っている〔1933 年 「古典みをたずねて」『婦人画報』6 月、「娘達のために」『婦人公論』9 月；1936 年 日日 9/29(8)；1937 年 「女性美と洋装」『新装』3 月〕。

大正の末にある女性は、「玄関に短いスカートからにょっきりと足を出して、いらっしゃいましと天井をついてお客を迎えたり、洋服に下駄ばきで炊事をする形などは、誰の目にも不格好すぎます‥‥‥‥」と言い[16]、昭和も 15 年という時期でも、「畳に靴下ばきは如何にも下の方があらわな感じがしてふさわしくない気がします」と言う洋裁家がいた〔1940 年 大阪朝日 2/6(5)〕。しかし現代の私たちの大部分はおそらく、ショートスカートや靴下ばきで畳の部屋ですごす不調和、など理解できまい。

変容は居住様式や、体格・体型・体質だけではない。明治期の日本人と、大戦後、そして現在の日本人の間にはときとしてお互いを理解しにくいような皮膚感覚の差や、日常の生活感覚の隔たりがある。これらは衣服構造やはきものの問題であるとともに、あたらしい〈美しいひと〉の問題、そしてまた身装の社会的評価という括りでの重要テーマとなるだろう。

５．まとめ ― 33 の重要テーマ

以上の検討を中心におき、あわせて旧著『近代日本の身装文化』(三元社、2005 年)の第 9 章「身装関連主題の検討」を参照して作成したのが、つぎに表 2 として提出する 33 の重要テーマである。

本電子年表では、この 33 の重要テーマを柱として、近代の同時代資料が選択され、これらの資料に掲載されているモノとコトガラが A 欄（事件－同時代資料で構成）、B 欄（現況－同上）、C 欄（回顧）に反映されることになる。さらに、B 欄では、適切な画像が提示され、先に構築をすすめている＜近代日本の身装画像データベース＞とのリンクもはかる計画である。

本研究は、独立行政法人日本学術振興会、平成 18 年度科学研究費補助金一基盤研究（Ｃ）を受く。

重要テーマ

1 身装の社会的評価　流行論
ハイカラ、隠微観、モダンガール
2 身装の経済的背景、　衣料品等価格
既製服、所有観、服装費比率、レンタル
3 情報一般　（女性の）知的向上
婦人雑誌、海外情報
4 衣料業界、供給システム
生産、流通、既製服
5 改良服、衣服改良
男女和装コート
6 美しいひと
7 標準化、標準服、国民服
8 映画、テレビ、そのタレント
9 身体観、体型、姿勢、動作
身体の露出、セクシー
10 衛　生、健康観　入浴、沐浴
洗髪、着古構造、不衛観、保育、ガーゼ
11 着　装　着装法
曳裾、様々な着こなし、重ね
12 衣服の構造、製作技術、
縫製、裁縫教育―編入、揚げ
13 素　材　地質、機能、色
ニードルワーク
14 子ども服、通学（服）
15 アンダウエア
16 職業婦人
女性の地位・社会的進出
17 芸　者
18 学生、女学生
19 フォーマルウエア　夜会
ビジネススーツ
20 外出着、よそ行き、訪問着
21 女性の和装一般　羽織・ゆかた・帯・袴
22 女性和装コート類
23 男性の和装全般
24 男性和装コート、外套一般
25 装飾品一般　指輪など宝飾品
26 副装品一般
帽子、ショール、手袋、持物、傘
27 男女の髪型一般
ザンギリ、日本髪、髪飾、結髪道具
28 束　髪
29 断髪、洋髪、パーマネントウエーブ
30 化粧一般　香り、香水
美顔術、刺青、美容整形
31 美容業、美容師
32 道路、街　交通
ファッション・ストリート、銀座
33 照　明

注）

1）高橋晴子.「身装電子年表の作成に関する基本的課題：近代日本身装画像データベースを前提として」.『大阪樟蔭女子大学論集』. No.41, 2004.3, p.161-174

2）高橋晴子.「身装電子年表の作成に関する基本的課題：風俗・流行関連主題」.『大阪樟蔭女子大学論集』. No.42, 2005.3, p.197-212

3）旧著『近代日本の身装文化：「身体と装い」の文化変容』（三元社　2005 年 12 月）の弟 9 章において、私は基本テーマを‘主要テーマ’とよんだ。しかし‘主要’と‘重要’とでは耳に聞いても目で見ても紛らわしいため、以後は基本テーマとよぶことにしたい。

4）MCD プロジェクトメンバーは次の通りである。　高橋晴子（大阪樟蔭女子大学）、久保正敏・中川隆（国立民族学博物館）、八村広三郎（立命館大学）、猿田佳那子（同志社女子大学）、田中昌美（愛知新城大谷大学）、大丸弘。

5）1 本の衣服標本画像データベースおよび 4 本の文献データベースで構成され、合計約 12 万 6 千件（2006 年 9 月現在）のデータを収録している。国立民族学博物館のホームページより公開（http://www.minpaku.ac.jp）。

6）「解説」の項.『年表・近代日本の身装文化』. 三元社,　2006

7）高橋晴子.「身装画像データベースのデータソースとしての新聞連載小説挿絵：明治中期を対象として」.『アート・ドキュメンテーション研究』.No.12, 2005.3, p.12

8）身装にかかわるアイテムを縦軸とし、モノの流れとそれにかかわる問題を横軸にしたふたつの面から構成されるファセット分類。これは身体と装いにかかわる記事を対象とした服装関連雑誌記事抄録索引紙『衣料情報レビュー』（1977 年～2002 年 大阪樟蔭女子大学衣料情報室発行）に掲載された記事の分類のために考案したものである。24 年間で採録した 59,200 件の記事を分類するにあたって大きな欠陥はなかった、というのが今回参考にした理由である。

9）鏑木清方.「歌奴三態」.『鏑木清方文集　6　時粧風俗』. 1934.　白鳳社.　p.68

10）「目についたる最近の流行」.『婦人くらぶ』. 1909 年 3 月

11）「染物と織物」.『婦人世界』.1910 年 5 月

12）「初秋の流行」.『婦人画報』1916 年 9 月

13)「流行の夏物」.『読売新聞』1912 年 7 月 2 日(10 面)
14)鏑木清方.「えりもと」.『鏑木清方文集 6 時粧風俗』. 1935.　白鳳社.　p.35
15)川村文芽.「帯地とその模様」『.婦人世界』1910 年 10 月　p.74～75
16)村松きく子.「外出は洋装・家庭では新案の仕事着を」.『婦人の国』1926 年 2 月